

分娩時胎児管理に関する総合的研究

前田 一雄・新井 正夫
諸橋 侃・寺尾 俊彦
中野 仁雄

分娩時における胎児の異常を診断し、さらに適切な処置や治療を行い、それによって胎児死亡を防ぎ、新生児仮死の発生を予防し、新生児の罹病を減少させ、ひいてはその後の神経性異常の発生を予防することは、分娩時胎児管理の大目標であり、本研究班においても、諸外国における分娩時胎児管理の現況を調査し、本邦における成績を加えて、一般に施行されるべき最適の分娩時胎児管理法を検討完成し、また、本研究班の各研究者によって最も進歩した先端的な研究を進行させて、さらに胎児管理法の進展を期することを目標としている。ここでは第1の目的について述べることにする。

1. 諸外国における分娩時胎児管理の現況調査

これまでに諸外国で報告された各種の分娩管理について、全研究者を統一した検討を行う。

1975～1980年のあいだの文献について、分娩時胎児監視、胎児仮死、分娩前スクリーニング、胎児仮死治療、児の予後、コストパフォーマンスなどを検討する。まずMEDLARS文献検索システムによって、上記6年間の当該文献記載誌や題名を検索した。作業は新井班員があたり、6年間の文献をすべてアウトプットした。総文献数は14516であり、各班員に分配して検討した。

その内訳は

新井	3264件	(妊娠合併症、産科麻酔)
前田	2636件	(" 分娩監視)
寺尾	2757件	(" 胎児心臓)
諸橋	2778件	(" 胎児血液)
中野	3081件	(" 分娩)

となっている。

つぎに文献調査票を作製した。調査票内容は中野班員が検討した。すでにMEDLARSアウトプットから関係諸文献を描出して、全体で約

1000枚の調査票を製作した。今後は電算機検索のため、各調査票をカードにパンチし、ついで最初に内容リストを作るなどの作業を進める。最終的に分娩時胎児監視に関する総説を書き、本邦の成績を加えて分娩時胎児管理についての方策を確立する。

2. 出生前診断に関するNTHレポートの検討
本レポートは1979年に出版されており、3部分に分かれているが、分娩時胎児仮死は約200ページにわたって報告されている。前田はQuilligan教授の尽力によってこれを入手し、各班員と共に検討した。詳細は前記文献調査と併せて報告するが、その概略についてみると次の通りである。

米国の分娩時胎児監視は主として内測法、直接法によって行われており、胎児電極による胎児心拍数図と、子宮内カテーテルによる陣痛曲線を診断資料としている。これをEFM (electronic fetal monitoring) とよんでいるが、上記のように侵襲を伴う方法であるため、その適用範囲が検討され、ハイリスク症例の管理には是非必要とされるが、ロウリスク症例では侵襲の少ない方法が望ましく、外測法の発達が望ましいとしている。ロウリスク例では甚だ頻回の聴診を熟練者が行うこともよいとしているが、これはEFMのリスク・ベネフィット判断によるものであり、費用は外測法監視よりもはるかに高額となるであろう。

わが国の現状はこれと異なり、無侵襲の外測法による分娩監視装置が非常に発達しているため、ロウリスク例を含めて全例に胎児監視を行っても障害のおそれはなく、もちろん必要があれば内測法によるEFMも実施可能であるため、NIH報告にみるようなEFM単独の胎児監視よりも著しくすぐれた面があり、異常例の診断だけでなく、

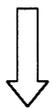
正常例においても異常の突発にそなえて胎児監視を実施することが十分可能である。今日では、分娩中だけでなく、分娩開始前、妊娠中においても

胎児心拍数図診断が行われ、胎児予後改善に必要とされているが、この点でも、外測法を用いることには大きな利点がある。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



分娩時における胎児の異常を診断し,さらに適切な処置や治療を行い,それによって胎児死亡を防ぎ,新生児仮死の発生を予防し,新生児の罹病を減少させ,ひいてはその後の神経性異常の発生を予防することは,分娩時胎児管理の大目標であり,本研究班においても,諸外国における分娩時胎児管理の現況を調査し,本邦における成績を加えて,一般に施行されるべき最適の分娩時胎児管理法を検討完成し,また,本研究班の各研究者によって最も進歩した先端的な研究を進行させて,さらに胎児管理法の進展を期することを目標としている。ここでは第1の目的について述べることとする。